

意味空間の形成とコミュニティ ～ペットボトル回収機の普及を例として～

The Role of Community for Forming Social Semantic Space

内 藤 勲

Isao NAITO

和文要旨

人は意図を持って行動し、事後的な意味付けを経て新たな意図を形成する。意図形成の背景にある個人的な意味空間は、他者との関係性に制約された間主観的意味空間である。間主観によって形成される社会的意味空間を社会的な秩序形成の背景ととらえ、流行や普及について議論する。

この意味空間を形成する一つの重要な要素が言語化された表現である。しかし、言語そのものを含めて、言語化されない社会的な秩序が形成可能となる背景があることも事実である。本稿では言語化に先行する社会的意味空間形成の過程として共同体を取り上げ、その進行する場として、コミュニティを取り上げる。いびがわみずみずエコステーションの事例研究を通して、共同体の多様な側面を議論し、社会的意味空間形成の場としての多様なコミュニティのあり方を議論する。

英文要旨

A person intends and behaves. Meaning of this behavior is constructed in ex post. And a new aim is formed via its meaning. Intersubjective meaning space is a background of such aim formation. It is restricted by relationship with others, and I'm calling it 'social meaning space'.

An element indispensable to formation in social meaning space is language representation. But the background forming our social order isn't always represented in language. A co-experience is taken up as the process of the social meaning space forming. A community is taken up as the place where its process progresses. We discussed that co-experience has the various figure.

和文キーワード：社会知、共同体、コミュニティ

英文キーワード：Social Meaning Space, Co-experience, Community

目 次

1. 社会的な意味空間の構築
 - (1) 社会的な知の構築
 - (2) 意味付けと意味形成
 - (3) 意味空間の形成
2. 空き缶等のリサイクルの状況
3. 『環境の駅』の事例
 - (1) 揖斐川町について
 - (2) NPO「いびがわみずみずエコステーション」設立までの経緯

(3) NPO いびがわみずみずエコステーションの活動

4. 結語に代えて

人は何かしらの意図を持って行動し、それへの事後的な意味付けを経て新たな意図を形成する。そうした意図形成の背景にある個人的な意味空間は、他者と関係のない主観で形成されているのではなく、他者との関係性に制約された間主観的意味空間である。この間主観によって形成される社会的な意味空間を社会的な秩序形成の背景ととらえることでモノに限らずコトにおける流行や普及について議論できると考えている。

この意味空間を形成する一つの重要な要素は言語化された表現であろう。しかし、言語そのものを含めて、言語化されない社会的な秩序が形成可能となる背景があることも事実であろう。本稿では、いわば言語化に先行する社会的意味空間形成の過程として共体験を取り上げ、その進行する場として、コミュニティを議論したい。

1. 社会的な意味空間の構築

(1) 社会的な知の構築

行動の結果としての体験を通じて、世界を類型的にとらえたものが流行や普及を考える世界についての知の源泉であるとしても、それは個人の知でしかないように思われる。しかし、知に関して「個」と「全」は必ずしも対立するものではない。社会的な知は、「自分一人だけの考え」としての主観的な知でもなければ、「特定の認識作用を超えた」客観的な知でもない。

図表1 ウィレイによる主観性の分類

水準		主観性の種類
ミクロ	1. 個人	1. 内主観性 (Intra-subjectivity)
	2. 相互作用	2. 間主観性 (Inter-subjectivity)
マクロ	3. 社会構造	3. 集主観性 (Generic-subjectivity)
	4. 文化	4. 超主観性 (Extra-subjectivity)

我々の主観は純粹に「一人だけ」の主観ではなく、関係性によって制約された主観である。

主観についてウィレイ (1988) は、図表1のようにまとめている。ここでは、ウィレイの主観分類に基づいて我々の知の分類を試み、そこから関係性に制約された主観について考察を進めよう。

個人が物的環境と相互作用してその物的環境について知ることは、その個人的な環境との相互作用だけに着目すれば個人的な知である (例えば、ラグビーボールを蹴ることで球形でないボールの弾み方、転がり方を知る)。これは他者が全く介在せず個人的に得られた知であり、内主観的知ということになる。

内主観的知を持つ者が同様に内主観的知を持つ他者と相互作用して知を得ることは、他者の内主観に相互制約される知を得ることであり、間主観的知となる。「私」と「あなた」の関係として記述される間主観的知の獲得には必ずしも言語は必要ではない (例えば、ラグビーボールを蹴る様子を見ている監督の反応を見て知る)。「私」と「あなた」の関係の中で「私」が環境についての内主観的知を間主観的知へと拡張している。

内主観的知を「私」の知と呼べば、間主観的知は「我々」の知であり、我々関係に入ることによって内主観的知は間主観的知へと拡張される。社会的に生きている我々の個人的な知は必ずしも間主観的知へと拡張されている。

ウィレイのマクロ水準での知は「私」と「あなた」の関係を「彼等」の関係に記述し直すこと (客観化¹⁾) で得られる。「私があなただを殴れば、あなたは怒る」を「人物Aが人物Bを殴れば、人物Bは怒る」と記述し直すことで、「我々」の世界は「彼等」も含まれるより大きな世界の記述となる。十分に長い時間をかければ、多くの構成員がいる社会でも、安定した間接的相互作用 (他者を介在した相互作用) の繰り返しで、直接的相互作用による間主観的知を超えた広がりのある相互制約された知は形成されうる。それが、超主観的知ということになる。コミュニティはこの超主観知の源泉である。

個人的な知をマクロ水準へ拡張する別の方法が表象化である。言語によって相互作用そのものを表象化することで、相互作用そのものが間接化される。体験的な相互作用を、他者が介入する相互作用も含めて体験的相互作用と呼べば、相互作用そのものが表象化を通じて間接化され、拡張されるという意味で、表象が介入する相互作用を拡張的相互作用と呼ぶことができようⁱⁱ。この拡張的相互作用によって得られる知が集主観的知である。

(2) 意味付けと意味形成

意味を形成することは、①原因-結果関係を認識すること、あるいは部分-全体関係を認識すること。②原因、結果、部分あるいは全体として認識される対象を分類する集合関係を認識すること。③具体的対象が含まれる（あるいは含まれない）集合を認識することの総体とすることができる。

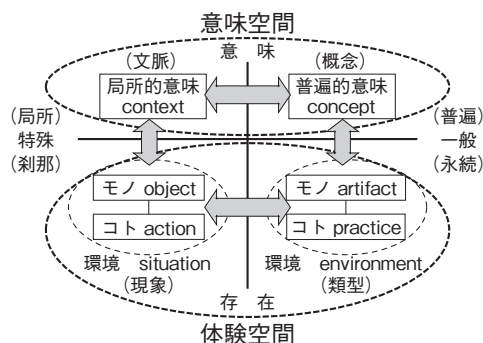
全体としての「顔」の部分として「鼻」とをとりえれば「鼻」という集合は「顔」との関係で規定されている。この場合、何の必要性もなくロボットの顔に相当する部分の中心に突起物をつければそれは鼻とされる。他方、例えば「鼻」を「気管支」との関係で規定することもできる。鼻の機能不全が咳という気管支の防御機能を引き起こしたという因果関係で鼻を規定すると、ロボットの顔に相当する部分の突起は鼻ではなくなる。

意味付けることは、既存の規定に基づいて対象を集合の中にも含ませることである。ただし、分類を規定する集合は常に固定されているわけではないので、我々は集合そのものを新たに創り出す。意味形成は単なる意味付けではなく、そのような新しい分類基準（集合）を創ることも含まれている。つまり、関係性の当てはめと創造の過程が意味形成とすることになる。

(3) 意味空間の形成

原因-結果関係あるいは全体-部分関係を形成する類型的集合的関係の創造あるいはそこへの当てはめが意味の形成であるとすれば、そうした意味形成には直接的な体験が不可欠であると同時にその直接的体験を意味化することが不可欠である。

図表2 体験空間からの意味空間形成



我々が体験する現象は体験空間の中で常に局所的でユニークな存在としてのモノ (object) を対象あるいは環境として、まさにその時に行うコト (action) である (図表2 参照)。

その時々を経験しているユニークな現象は、その前にあった現象やその現象の起きている場所や、あるいはその後に予想されている現象とユニークに関連づけられている。今、経験している現象の意味はそうした特殊で刹那的な関係性として意味付けられるそれが局所的意味 (context: 文脈) である。

常に経験しているユニークな現象は同時に類型化されたモノ (artifact) や類型化されたコト (practice) としても認識される。我々は、一つ一つユニークで特殊な現象を他と同じで一般的な類型としても認識する。

一般化されたモノ-コト (artifact-practice) は体験できる存在であるが、概念化される場合には、それは可能性のある文脈を含めた総体として他の様なモノ-コトと関係づけられ、他の様々な文脈や概念と関係づけられる。概念化は、その対象そのものだけが概念化されるのではなく、同様に概念化される他の様々な存在とともに相互に、自己言及的に、あるいは階層的に関係づけられる。

本稿で社会的知として言及しているものは相互作用のよって形成されたこの意味空間であり、社会において観察されるパターン化された行動はこの意味空間を背景としていてと考えている。こうした意味空間形成には言語が重要な役割を果たすと考えられる。しかし、同時に言語の成立もこの意味空間形成に依拠している。先に述べた超主観知である。意味空間形成にお

ける超主観知の側面を議論するために、次節においてペットボトル回収機の普及を例に共同体の役割を考察しよう。

2. 空き容器リサイクルの状況

「容器包装リサイクル法（平成7年）」の制定直後のアルミ缶やスチール缶のリサイクル率はそれぞれ70.2%、79.6%（1996年）であったのに対してペットボトルのリサイクル率は9.8%（1997年）と低かった。その後、回収率は上昇しているものの、ここ数年回収率はそれほど上昇していない。アルミ缶の回収率は2004年に85%を超えた後、2007年には92.7%まで上昇した後に2008年の87.3%まで低下している。同様にスチール缶の回収率は2001年に85%を超えた後、2005年には88.7%まで上昇下の知に2007年には85.1%に低下している。他方、ペットボトルの回収率は2003年には60%を超え、6年間で50ポイント以上上昇しているものの、その後はのび止まって60%台を推移している。特に、市町村による回収分については2003年に48.5%に到達した後、ほとんど上昇していないⁱⁱⁱ。

地球環境の問題が声高に叫ばれている現在、省エネ・省資源だけでなく、リユース、リサイクルと言った再資源化も重要である。したがって、回収率が伸び悩んでいる現在、使用済み容器の回収率を上昇させる方策を考えることが不可欠である。特に、回収率がそれほど高くなく、使用済みペットボトルの海外流出も問題とされているペットボトルの回収率を上昇させる方策が求められている。

こうした状況の中で、自治体による回収率向上の新たな試みも為され始めている。例えば、東京都足立区では、区民を対象に、区内に設置されているペットボトルの自動回収機と生ごみ処理機で、ICカードを使った買い物券や有機野菜などと交換出来るポイントシステムを始めている。当初、スーパーなど16カ所にペットボトル回収機が設置されていたが、現在は30カ所に増加しており、回収の実績も上がっている。このペットボトル回収システムの回収実績は、平成19年12月までの累計で、294トン、832万本となっている。この期間の足立区回収

全ルート合計回収量が前年比で約11%増となっているので、回収量全体の増加に貢献している^{iv}。

このような回収報奨金方式による回収率向上の試みはかなり以前から試行されてきた。1985年には空き缶を対象にしたクジ付きの回収機が科学万博のつくばエキスポセンターに設置され、7月21日から9月8日までの回収期間中に37,000個の缶が集められている^v。また、1991年には、川崎市において、空き缶1個1円の換算、300枚単位で図書券と交換できるチケットを発行する空き缶回収機での回収実験が開始されている^{vi}。この回収奨励金方式の空き容器回収を一躍有名にした活動は早稲田商店会による活動（ラッキーチケット付きエコステーション）であった。しかしながら、一時的には盛んに報道されてはいたものの、空き容器の回収率を向上させる方式としてはなかなか定着していないことも事実である。

社会的には望ましいと考えられたとしても、社会の中に根付く活動にすることはそれほど簡単なことではない。また、社会的な望ましさとは言っても、関係の仕方によって望ましさは変化する。経済性が強く関与している活動であれば、経済的であること、利益があること、金銭的に節約できることなどがはっきりとしており、その知識を普及させることができれば、その活動を普及させることができる。その場合、知識を普及させることが重要な鍵となるが、経済性が関与していない場合や時間や労力などの社会的なコスト負担がある活動の場合には、新たな活動を普及・定着させることは困難になる。

図表3に示されるように、早稲田商店会タイプのエコステーションが設置されたことがある商店街は76あるが、設置された時期は2002年がピークで、2004年が最後となっており、現時点で稼働しているエコステーションの数は明らかではない^{vii}。ラッキーチケット付きエコステーションは、「商店街の活性化」という言語表現の共通性と「エコ」に注目が集まりつつあった時代背景によって、マスコミやホームページ情報などを通じて急速に広がった。しかし、全国的な活動の継続性はそれほどなかったとも言えよう。

本稿では、より共同体に密着した活動事例を

図表3 エコステーションが設置されたことのある商店街

都道府県	市町村区	商店街	設置機種	開設年
北海道	士別市	士別市中心商店街振興組合	缶	2000
	追分町	追分町本町商店街協同組合	缶	2004
青森県	弘前市	西弘前駅前通り商店街	缶・ペット	2001
秋田県	男鹿市	船川港商業振興組合（葵プラスカード協同組合）	缶・缶	2001
岩手県	石鳥谷町	石鳥谷町商業商業振興協同組合	缶	2002
山形県	山形市	七日町商店街振興組合	缶・ペット	2000
	志津川町	志津川町商工会	缶・ペット	2003
宮城県	涌谷町	涌谷町商工会	缶・ペット	2003
	仙台市	西多賀商店街振興組合	缶	2004
福島県	飯野町	飯野町商工会	缶・ペット	2001
	福島市	南福島杉妻繁盛会	缶・ペット	2002
	相馬市	そうまエコステーション	缶	2003
新潟県	長岡市	大手通商店街	缶・ペット	2000
	三条市	協同組合一の木戸商店街	缶・ペット	2001
	豊栄市	豊栄駅前通商店街振興組合	缶・ペット	2001
	新津市	新津商店街協同組合連合会	缶・ペット	2002
栃木県	小山市	御殿町商店会	缶・ペット	2001
茨城県	ひたちなか市	おもてまち南商店街振興組合	缶・ペット	2001
埼玉県	戸田市	さつき通り商店街振興組合	缶・ペット	2000
	上福岡市	ラッキーチケット参加店の会	缶・ペット	2002
千葉県	野田市	野田市商店街連合会	缶・ペット	2002
	新宿区	早稲田商店会（早稲田1号館）	缶・ペット	1998
東京都	千代田区	早稲田駅前商店会（早稲田2号館）	缶・ペット	1999
	麹町	麹町 KESS	ペット	2000
神奈川県	厚木市	厚木なかちよう大通り商店街振興組合	缶・ペット	2001
	厚木市	あつき商和会	缶・ペット	2001
山梨県	南部町	南部商工会	缶	2000
	韭崎市	韭崎市商工会	缶	2001
	大月市	大月商店街協同組合	缶・ペット	2002
	南アルプス市	南アルプス市商工会	缶	2002
長野県	飯山市	飯山本町商店街振興組合	缶・ペット	2000
	佐久市	協同組合中込商店会	缶・ペット	2001
	松川町	あらい商店街連合会	缶・ペット	2002
	豊野町	豊野町商工会	缶・ペット	2003
静岡県	浜松市	佐鳴台商店街繁栄会	缶	2002
	水窪町	水窪町商工会	缶	2003
	下田市	下田 TMO	缶・ペット	2004
愛知県	春日井市	勝川駅前通商店街振興組合	缶・ペット	2000
石川県	加賀市	山代温泉桔梗が丘商店街	缶・ペット	2000
	七尾市	七尾市駅前通り商店街振興組合	缶	2001
福井県	武生市	*武生商工会議所	缶	2000
滋賀県	彦根市	登り町グリーン通り商店街振興組合	缶・ペット	1998
京都府	舞鶴市	舞鶴平野屋商店街振興組合	缶・ペット	2001
和歌山県	田辺市	田辺市商店街振興組合連合会	缶	2000
大阪府	枚方市	宮之阪中央商店街振興組合	缶・ペット	2001
	神戸市	*アスタ久二塚1番館	缶	2001
兵庫県	佐用町	空缶でもうけてもええ会	缶	2001
	三田市	エコステーションの会	缶	2002
	高砂市	伊保駅前商店会	缶	2003
	洲本市	本町五六商店街振興組合	缶・ペット	2003
鳥取県	鳥取市	鳥取本通商店街振興組合	缶	2002
	福部村	福部村役場	缶	2004
鳥根県	三刀屋町	エコステーションみとや	缶	2002
	浜田市	浜田駅前銀天街協同組合	缶	2004
岡山県	倉敷市	朝日町商店街振興組合	缶	2004
広島県	倉敷市	倉敷商店街振興連盟	缶	2003
	横川市	横川商店街振興組合	缶	2002
山口県	竹原市	竹原駅前商店街振興組合	缶・ペット	2003
	山口市	山口市商店街連合会	缶	2001
高知県	由宇町	由宇町商工会	缶	2003
	高知市	おびさんロード商店街振興組合	缶・ペット	2000
愛媛県	新居浜市	*新居浜商店街連盟	缶・ペット	2001
徳島県	北島町	北島町商工会	缶	2004
福岡県	福岡市	福岡エコタウン推進委員会	缶	2002
大分県	別府市	亀川商店街振興組合（1号館）	缶	2000
	日田市	日田駅前通り商店街振興組合	缶	2000
佐賀県	多久市	京町商店街協同組合	缶	1999
	佐賀市	北水商店街振興組合	缶・ペット	2001
熊本県	熊本市	下通二番街商店街振興組合	缶	2000
	一宮市	阿蘇・一宮町門前町会	缶	2001
	水俣市	*水俣市商店会連合会	缶	2001
長崎県	島原市	島原商店街連盟	缶	2001
宮崎県	延岡市	協同組合祇園町銀天街	缶・ペット	2000
鹿児島県	鹿児島市	宇宿商店街振興組合	缶・ペット	2004
沖縄県	平良市	西里大通り商店街振興組合	缶	2001
	那覇市	栄町市場商店街振興組合	缶	2003

出所：早稲田エコステーション研究所 HP (<http://www.ecoship21.jp/ecostation/ecoichiran.html>)

通して共体験の重要性を考察したい。

3. 『環境の駅』の事例

岐阜県揖斐川町にあるNPO「いびがわミズみずエコステーション」では、『環境の駅』と命名した拠点で自動回収機（Reverse Vending Machine：以下RVM）を用いた回収報奨金方式での飲料空容器回収の活動を展開している。本節では、RVMによる空き容器回収を軸としながら、「いびがわミズみずエコステーション」の活動事例を紹介する。

(1) 揖斐川町について

揖斐川町は岐阜県の西北に位置し、中心部を木曾三川のひとつである揖斐川が流れている町である。1955年、揖斐川が山間部から濃尾平野に流れ出てくる場所に位置していた揖斐町、北方村、大和村、清水村、小島村が合併し揖斐川町が発足し、翌、1956年に隣村であった養基村の一部を編入した。現在の揖斐川町は1955年に発足した揖斐川町と揖斐郡内の5村（谷汲村・久瀬村・春日村・坂内村・藤橋村）が2005年に合併したものである。

人口は減少しつつあり、(旧)揖斐川町においては2000年の19,207人から2004年の18,507人へと4年間に2.7%減少している。(新)揖斐川町換算では2000年の27,453人から2004年の26,437人へと4年間に3.7%減少している。合併後もその傾向は変化しておらず、4年間で5.3%減少して、2008年の(新)揖斐川町の人口は25,027人になっている。(図表4参照)

岐阜県の市町村民経済計算結果（平成18年

度）によると、2006年の(新)揖斐川町の経済総生産は約990億円で、その約1/3にあたる35%が製造業であり、次に多い業種は建設業の15%となっている。自治体などの政府系サービスが3番目で、13%を占めている。製造業に関しても、特に優位性を持つ業種はなく、規模も小規模なものが多い。

このように、(旧)揖斐川町は濃尾平野の一角に位置するものの、その中心部である名古屋からはかなりの離れており、過疎傾向のある自然豊かな町である。なお、本稿において紹介する事例は行政的な地域としては1955年に発足した(旧)揖斐川町における活動であるので、以下では特に記述がないかぎり「(旧)揖斐川町」を単に「揖斐川町」と表記する。

(2) NPO「いびがわミズみずエコステーション」設立までの経緯

NPO「いびがわミズみずエコステーション」を設立する母体となったものは揖斐川町商工会青年部の活動であった。1980年代後半に青年部によって「夢づくり委員会」が設立された。一般的な商工会の活動、特に青年部の活動であれば、将来の地域産業の振興が大きなテーマとなる。しかしながら、当時から揖斐川町は経済的発展の流れには乗っておらず、経済的発展の可能性は低いものであった。そのような町の状況をふまえた上で、夢づくり委員会では住みよい町づくりがテーマとなっていく。

1960年代までは、揖斐川町を流れる河川流域の至る所で乱舞する蛍を見ることができたが、1970年代以降、農薬の使用など様々な要因で河川が汚れ、蛍を見ることがも少なくなって

図表4 揖斐川町の人口推移

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
(新)揖斐川町	27,453	27,316	27,067	26,717	26,437	26,192	25,794	25,395	25,027
(旧)揖斐川町	19,027	18,969	18,788	18,625	18,507				
谷汲村	4,028	4,029	4,044	3,980	3,926				
春日町	1,722	1,653	1,628	1,570	1,535				
久瀬村	1,511	1,488	1,472	1,443	1,408				
藤橋村	502	527	500	488	473				
坂内村	663	650	635	611	588				

(注) 岐阜県人口動態統計調査より作成。2004年までの(新)揖斐川町は2005年に合併した1町5村の人口を合計した値である。

きていた。また、ゴミの投棄などによる河川の環境悪化も進んでいた。1980年代後半には揖斐川町による河川美化運動、河川清掃（除草）事業が始まっており、河川を汚染しないせっけんづくりの講習会や授産所で作られたせっけん販売を行うボランティアグループも1980年代後半に活動を始めていた。また、1988年には揖斐川に沿って走る市民マラソン「いびがわマラソン」も始まっていた。そうした状況の中で、夢づくり委員会の中では、「自分たちの子供達が住みたい町」を作るために河川環境の美化をテーマとすることとなっていた。

この夢づくり委員会を核として、揖斐川流域17市町村の住民248人によって、1993年に、『人に優しく川に優しく』《緑の地球を子どもたちへ》をスローガンとして、「日本のどまんなか《いびがわ》ミズみずフェスタ実行委員会」が発足した。その後、ミズみずフェスタ（全国利き水大会・ウォーターラリー・いびがわ青空市場・リサイクルコーナー）が年1回開催されていた。しかし、イベントは2,000~2,500人の動員はあるものの、一過性であり、なかなか実生活の中で活かしてもらうまでには至らない状況であった。

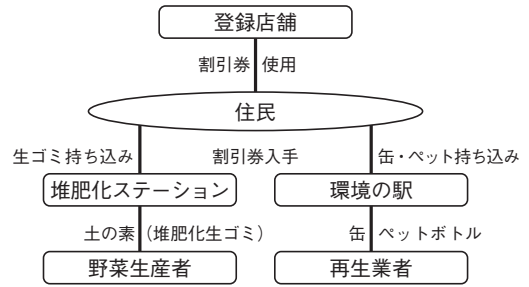
そこで、活動の拠点を作り、活動を日常的にするため、商店街の空き店舗を活用した「NPO いびがわミズみずエコステーション」が2001年に設立された。

(3) NPO いびがわミズみずエコステーションの活動

「人に優しく川に優しく」、「きれいなまちを次の世代へ」、「緑の地球を子供たちへ」をスロー



図表5 環境の駅と堆肥化ステーションの仕組み



ガンに、循環型社会を構築しまちづくりに貢献することを目指して、次のような活動している。

- ①環境の駅（空き店舗を活用，RVMで空缶等を回収，利用者に登録店舗のチケット配布）
 - ②堆肥化ステーション（生ゴミを回収，利用者に登録店舗のチケット配布）
 - ③わが家の環境ISO認証制度（各家庭でゴミの取り組みを認証）
 - ④走れエコパッカー事業（子供にポスターを描いてもらい，それをシール化し，ゴミ収集のパッカー車に貼って走ってもらう）
 - ⑤ミズみずセミナー（毎月第2土曜日・第4木曜日開催）
 - ⑥揖斐川本流クリーン大作戦（毎年5月に実施）
- 環境の駅および堆肥化ステーションは早稲田商店会が有名にしたラッキーチケット方式であり、図表5に示したような仕組みで実施されている。

環境の駅1号店は、先に述べたように、2002年1月に揖斐川町の中心部である三輪の空き店舗を使用してオープンした。同年10月には堆肥化ステーションも本格稼働し、揖斐川町の日常的な活動が本格化していった。イベント活動も含めて、ミズみずフェスタ時代からの活動は揖斐川町で行われていたが、環境の駅に関しては他の地域へも拡大していった。

2004年4月には揖斐郡坂内村に環境の駅2号店がオープンし、同年10月には揖斐郡久瀬村に環境の駅3号店がオープンしている。さらに、2006年3月には揖斐郡谷汲村に環境の駅4号店がオープンした。

設置の形態は、それぞれ異なっている。1号店の回収機は屋内に設置されているが、2号店は旧村役場前の駐車場、3号店は道の駅の駐車場、4号店は昆虫館の軒下を利用して設置され



ている。写真に見られるように、飲料の自動販売機横に設置するなどして、空き缶・空きペットボトルの回収意識を高める努力がなされている。

2号店から3号店はそれぞれ旧藤橋村、坂内村、谷汲村にあり、いずれも揖斐川流域であるⁱⁱⁱ。さらに、同じ揖斐川流域ではあるが、下流に位置する輪之内町にオープンする計画もあったが、実現には至らなかった。

4. 結語に代えて

いびがわみずみずエコステーションの成功は中心的であった商工会青年部のメンバーや町役場に勤務していたメンバーなどが地元での多重の人間関係を持っていたことに負うところが大きい。揖斐川町というコミュニティの中で1980年代から続いている地域の活動が「川をきれいに」と言う行動を継続させる社会的知としての超主観的知を形成したことは論を待たない。

しかしながら、「環境の駅」が拡大した地域は同じ郡内（現在は町村合併で同じ町内）ではあるが、かなり距離的に離れており、コミュニティと呼べるほど関係性は重層化していない。同じコミュニティとは呼べない地域にも環境の駅が拡大した背景の一つは、空き缶・ペットボトルとチケットの交換という仕掛けにあるのであろう。しかし、早稲田商店会に始まるエコステーションには継続していないものが少なくない。言語的な表現を理解し、活動を行う場合の継続性とは異なる継続性の背景があるのではないだろうか。それこそが、最初に指摘した超主

観性に基づく社会知であろう。

いびがわみずみずエコステーションの事例の場合には、「川」という超主観的意味の共通性をもたらす環境があったと言うことではないだろうか。同じ川の流域でも下流域の輪之内町には拡大しなかったことを考えると、単に川ではなく「中流域」の川という類似の環境がもたらすコミュニティの類似性、さらには社会的知としての超主観的知としての類似性を推定することが可能に思われる。

揖斐川の、誌流域も含めた中・上流域に当たる地域では、誰しもが同じような川遊びの経験を持ち、同じように虫と戯れた経験を持ち、同じように川魚の減少を感じていた。それらの経験は言葉で表現するまでもないものであり、自分たちが知っている以前の自然環境を取り戻したいという気持ちも同様のものだったと考えられる。「川」、「遊び場所」といった環境の共通性が直接的な共同体験のない人々に共同体験と同様の超主観的な社会知を持たせたのではないだろうか。

超主観的知は言語の背景でもあり、従って、集主観的知の背景でもある。コミュニティ環境の類似性によって超主観的知の共通性を推定できるとすれば、物的環境に限らず、多様なコミュニティ環境の共通性に基づいて、社会知について言及できるのではないだろうか。引いては、言語によるコミュニケーションでの理解を深めるための方法を考えることも可能なのではないだろうか。言語表記された社会知の研究を進める上では超主観性の背景となる体験の共通性も重要な考察対象となるだろう。

脚注

- i 主観の主体と主観の対象の関係全体を「主観の認識・行為の対象となるもの」に変換するという意味で客観化という用語を使っている。
- ii 体験的相互作用、拡張的相互作用の名称は、研究仲間である涌田幸宏氏（名古屋大学）と古澤和行氏（愛知学院大学）との議論の中で生まれた。
- iii アルミ缶、スチール缶、ペットボトルの回収率はそれぞれアルミ缶リサイクル協会調べ、スチール缶リサイクル協会調べ、PETボ

トルリサイクル推進協議会調べである。ペットボトルの回収率の算定に際しては市町村による回収量と事業系回収量が利用されており、2000年までは市町村による回収のみである。

- iv 「リサイクルして、ポイントためて 足立で取り組み開始」朝日新聞，2006年11月26日朝刊，東京西部版35面。「あだちエコネット事業（企業提案型資源回収事業）」総務省平成19年度地方行政改革事例集より。
- v 「お楽しみカンコロジ－」朝日新聞，1985年9月12日夕刊，7面。
- vi 「図書券と交換します 市，空き缶回収機を5月から実験導入へ」朝日新聞，1991年2月14日朝刊，神奈川版。
- vii エコステーションのホームページ情報の更新は現在ほとんどなされていない。筆者が埼玉県のさつき通り商店街振興組合，ラッキーチケット参加店の会，および東京都の麴町KESSを2006年に訪れた際にはすでにエコステーションは設置されていなかった。資源ゴミ回収拠点として，各地にエコステーションの名称を持つ場所が設置されているが，早稲田商店会発祥のエコステーションの多くは現在は稼働していないようである。
- viii 谷汲村には揖斐川本流は流れていないが，

大きな支流の一つである根尾川が流れている。

主要参考文献

- Wiley, N. (1988) "The micro-macro problem in social theory," *Sociological Theory*, Vol.6, No.2, pp.254-261.
- 藤村望洋 (2001) 『早稲田発 ゴミが商店街(まち)を元気にした!』 商業界刊。
- 拙稿 (2009) 「流行・普及・停滞と意味ネットワーク」『日本情報経営学会誌』(日本情報経営学会) 30巻1号, 64~76頁。